一番気乗のする時

芥川龍之介

僕は一体冬はすきだから十一月十二月皆好きだ。好きといふのは、東京にゐると十二月頃の自然もいいし、また町の容子(ようす)もいい。自然の方のいいといふのは、かういふ風に僕は郊外に住んでゐるから余計(よけい)そんな感じがするのだが、十一月の末(すゑ)から十二月の初めにかけて、夜晩(おそ)く外からなんど帰つて来ると、かう何(なん)ともしれぬ物の臭(にほひ)が立ち籠(こ)めてゐる。それは落葉(おちば)のにほひだか、霧のにほひだか、花の枯れるにほひだか、果実の腐(くさ)れるにほひだか、何んだかわからないが、まあいいにほひがするのだ。そして寝て起きると木の間(こま)が透(す)いてゐる。葉が落ち散つたあとの木の間が朗(ほがら)かに明(あかる)くなつ

てゐる。それに此処(ここ)らは百舌鳥(もず)がくる。鵯(ひよどり)がくる。たまに鶺鴒(せきれい)がくることもある。田端(たばた)の音無川(おとなしがは)のあたりには冬になると何時(いつ)も鶺鴒(せきれい)が来てゐる。それがこの庭までやつてくるのだ。夏のやうに白鷺(しらさぎ)が空をかすめて飛ばないのは物足(ものた)りないけれども、それだけのつぐなひは十分あるやうな気がする。

　町はだんだん暮近くなつてくると何処(どこ)か物々しくなつてくる。ざわめいてくる。あすこが一寸(ちよつと)愉快だ。ざわめいて来て愉快になるといふことは、酸漿提灯(ほほづきぢやうちん)がついてゐたり楽隊がゐたりするのも賑(にぎや)かでいいけれども、僕には、それが賑かなだけにさういふ時は暗い

寂しい町が余計（よけい）眼につくのがいい。たとへば須田町（すだちやう）の通りが非常に賑かだけれど、一寸（ちよつと）梶町（かぢちやう）青物市場（あをものいちば）の方へ曲（まが）るとあすこは暗くて静かだ。さういふ処を何かの拍子（ひやうし）で歩いてゐると、「鍋焼（なべやき）だとか「火事」だとかいふ俳句の季題を思ひ出す。ことに極（ご）くおしつまつて、もう門松（かどまつ）がたつてゐるさういふ町を歩いてゐると、ちよつと久保田万太郎（くぼたまんたらう）君の小説のなかを歩いてゐるやうな気持でいい気持だ。

十二月は僕は何時（いつ）でも東京にゐて、その外（ほか）の場処といつたら京都（きやうと）とか奈良（なら）とかいふ甚（はなは）だ平凡な処しかし

らないんだけども、京都へ初めて往(い)つた時は十二月で、その時分は、七条(しちでう)の停車場も今より小さかつたし、烏丸(からすまる)の通(とほり)だの四条(しでう)の通(とほり)だのがずつと今より狭(せま)かつた。でさういふ古ぼけた京都を知つてゐるだけだが、その古ぼけた京都に滞在してゐる間(あひだ)に二三度時雨(しぐれ)にあつたことをおぼえてゐる。殊(こと)に下賀茂(しもかも)の糺(ただす)の森であつた時雨(しぐれ)は、丁度(ちやうど)朝焼がしてゐるとすぐに時雨れて来たんで、甚だ風流な気がしたのを覚えてゐる。時雨といへば矢張(やはり)其時、奈良の春日(かすが)の社(やしろ)で時雨にあひ、その時雨の霽(は)れるのをまつ間(あひだ)お神楽(かぐら)をあげたことがあつた。それは古風な大和琴(やまとごと)だの箏(さう)だのといふ楽器を

鳴らして、緋(ひ)の袴(はかま)をはいた小さな——非常に小さな——巫女(みこ)が舞ふのが、矢張(やは)り優美だつたといふ記憶がのこつてゐる。勿論其時分は春日(かすが)の社(やしろ)も今のやうに修覆(しうふく)が出来なかつたし、全体がもつと古ぼけてきたなかつたから、それだけよかつたといふ訣(わけ)だ。さういふ京都とか奈良とかいふ処は度々ゆくが、冬といふとどうもその最初の時の記憶が一番鮮(あざや)かなやうな気がする。

それから最近には鎌倉(かまくら)に住(すま)つて横須賀(よこすか)の学校へ通(かよ)ふやうになつたから、東京以外の十二月にも親しむことが出来たといふわけだ。その時分の鎌倉は避暑客のや

うな種類の人間が少いだけでも非常にいい。ことに今時分の鎌倉にゐると、人間は日本人より西洋人の方が冬は高等であるやうな気がする。どうも日本人の貧弱な顔ぢや毛皮の外套（ぐわいたう）の襟へ頤（おとがひ）を埋（うづ）めても埋め栄（ば）えはしないやうな気がする。東清（とうしん）鉄道あたりの従業員は、日本人と露西亜（ロシア）人とで冬になるとことにエネルギイの差が目立つといふことをきいてゐるが、今頃の鎌倉を濶歩（くわつぽ）してゐる西洋人を見るとさうだらうと思ふ。

　もつとも小説を書くうへに於ては、寧（むし）ろ夏よりは十一月十二月もつと寒くなつても冬の方がいいやうだ。

また書く上ばかりでなく、書くまでの段取を火鉢にあたりながら漫然と考へてゐるには今頃（いまごろ）が一番いいやうだ。新年号の諸雑誌の原稿は大抵（たいてい）十一月一杯（いつぱい）または十二月のはじめへかかる。さういふものを書いてゐる時は、他の人は寒いだらうとか何（なん）とかいつて気にしてくれるけれども、書き出して脂（あぶら）が乗れば煙草を喫（の）むほかは殆（ほとん）ど火鉢なんぞを忘れてしまふ。それにその時分は襖（ふすま）だの障子（しやうじ）だのがたて切つてあるものだから、自分の思想や情緒とかいふものが、部屋の中から遁出（にげだ）してゆかないやうな安心した処があつてよく書ける。もつともよく書けるといつても、それは必ずしも作の

出来栄えには比例しないのだから、勿論新年号の小説は何時(いつ)も傑作が出来るといふ訣(わけ)にはゆかない。

（大正六年）

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　　１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
　　１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。